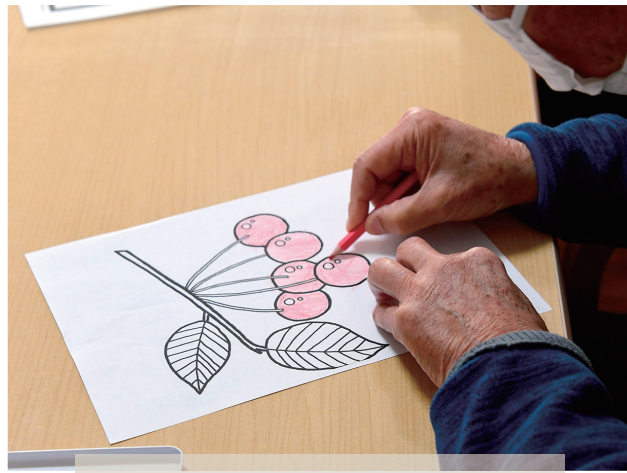




洗濯物たためもテキパキと片付いていく



細部にこだわりが光った塗り絵



ボールを使った運動。表情は真剣だ



大きな口でおやつをばくり



壁の装飾は利用者の手づくり。
取材当日は桜の飾りで、季節感を大切にしている

〃その人らしく〃を 第一に考え 一日の活動にも 利用者の対応にも 柔軟性をもたせる

神奈川県横浜市の北西部に位置し、川崎市との境目にある青葉区。その青葉区の住宅地に建っているのが、「ささゆりデイサービス 若草台事業所」だ。建物の見た目は、一般的な一軒家と何ら変わらない。看板こそ出ているものの、気づかなければここがデイサービスだとは思わないだろう。だが、その外観が利用者にとっては、〃通いたくなる効果をもたしているという。

「大きな窓があり、そこから見える中庭は外とのつながりを感じられるため、介護施設特有の閉鎖的な雰囲気がなく、ご利用者にとってここは『知り合いの家に遊びに来た』ような気持ちで通ってもらえているようです」と、施設長の皆川真由美さんは説明する。

「お一人おひとりがイキイキと自分らしく毎日を過ごして頂けますよう支援いたします」を理念とし、「その人らしさ」をいつも念頭に置いたケアを提供している同施設。毎日行うメインのレクリエーションはあるが、「絶対参加」と決めているものはない。ソファでゆっくりする人もいれば、テレビを見る人、塗り絵をする人、職員と談笑する人……と、利用者はそれぞれ思うままに過ごしている。ときには地域のボランティアが訪れてフラダンスやコーラス等を

一緒に行うこともある。

利用者のなかには「仕事にきている」感覚で来る人もいるそう。そのため、洗濯干しなどの家事援助や、時には一緒に買い物援助で花を買いに行き、庭の花を植え替えたりと活動内容に幅をもたせている。

「『記憶は残らなくても、感情は残る』と考えています。施設で過ごした時間を『楽しかった』と思ってもらいたい。そして、『楽しいことがあった』という感情をもち帰っていただきたいですし、そうなるようなかわりを心がけています」と皆川さん。活動中の写真を見た利用者家族から「こんな笑顔は久しぶりに見た」との言葉をもらうこともあるそうで、利用者にとって居心地の良い環境であることがうかがえる。

職員も、利用者に安心して過ごしてもらうための環境づくりに余念がない。利用者の人となりを理解したうえで、たとえば座る場所を工夫したりしている。利用者のなかには、うまく言葉にすることが難しい場合があるが、それでも、職員がうまく汲み取ってかたちになっているという。

柔軟にしているのは、活動内容だけではない。たとえば、お迎えの時間に利用者の気分が乗らなかつた場合、時間を置いて再度迎えに行くなど融通が利くようにしている。それは、「利用者家族にも自身の時間を大切にしてほしい」という思いがあるから。日中だけでも心休まる時間を届けたいと考えている。そんな柔軟な対応が、利用を始める決め手になった利用者も少なくないという。

▶ 続きは、本誌6月号をご覧ください